

『社会参加』を推進する主権者教育とは！？



開催日時：2020年8月22日（土） 運営媒体：Zoom

参加者数：62名

本会を企画するに当たって、主催者は次のような問題意識を持っていました。それは「そもそも教育活動を展開するうえで、授業者は『社会参加』をどのように捉えるのか。『社会参加』をしている子どもの成長した姿をどのように想定し、授業開発・実践を行ったのか。その授業によって子どもはどのように成長したのか。」というものです。これらの問いに対する考えは、学校現場の教師とそれ以外の教育関係者、教師同士でも異なります。シティブンシップ教育を推進するためには、教育に携わる多様な立場の人たちが持つ「社会参加」に対する考えを共有し、その違いについて議論する場が必要だと考えました。一方で、教員の「社会参加」に対する考えについて、生徒はどのように考えているのか。この点について、実際に授業を受ける立場である中高校生の「社会参加」についての考えを共有し、教員の「社会参加」に対する考えを問い直したいと思いました。このことから本会の目的を、「①多様な立場の教育関係者が持つ多様な『社会参加』についての考え方を共有し、教師の子どもの成長のまなざしを開かれたものにする。②学校とNPOにおける主権者教育の違いや違いの理由に着目して議論することで、主権者教育推進のための連携のあり方を検討する。」と設定することにしました。

当日は、学校現場やNPO等多様な立場で活躍されている話題提供者から「社会参加」に着目した主権者教育の実践報告をしていただきました。そのうえで、参加者と共に「社会参加」を推進する主権者教育について意見交換を行いました。当日のタイムスケジュールは、以下の通りです。

【当日のタイムスケジュール】

1. 本会の趣旨説明・・・5分

2. 話題提供者からの報告・・・85分

○話題提供者

・愛媛大学教育学部附属小学校教諭 品川崇さん

「電気自動車『リーフ』エンジニアと連携した小学校社会科授業作りと評価」

・愛媛大学教育学部附属中学校社会科教諭 高橋祐貴さん

「プラスチックごみ問題を取り扱った社会科授業作りと評価—地理的分野「世界の諸地域『アジア州』」の実践より—」

・備前市立伊里中学校教諭 岡島春恵さん（前認定NPO法人カタリバスタッフ）

「雲南市の教育魅力化推進事業の実践報告」

・NPO法人NEXT CONEXION 越智大貴さん&シビックスクール高校生の皆さん

「こども・若者の主体的な教育・体験活動について」

3. 参加者による意見交換・・・25分

4. 本会の振り返り—登壇者より—・・・5分

「3. 参加者による意見交換」では、以下のような意見が出されました。

グループ	主な意見
1	・議員としてどのように関わられるか、教師が議員に期待することは何か興味があった。かなり深い授業をされていることにおどろいた。様々な立場をきちんと取り上げる。教師が中立であることを目指す、自分の考えを披露することは悪いとはされていない。かなり新鮮なことをしているのが驚いた。ただし、驚くということは日常につながっていないということ。日常につなげることが大事で、これまでの授業（暗記など）の意味は何か。・子どものための授業づくりにいろいろ工夫されている。ごみ問題について多様な面を教えているところが勉強になった。・見えないことを具体的にイメージさせるモノを集めた。外部とのつながりに関して、実態が分かっている人を呼ぶことで実感を伴わせることができる。呼んで満足にならないように、教師がコーディネートする必要を感じる。・社会とのつながりが多くなると、社会からの影響を強く受けるため、良くも悪くもイメージが形成される。
2	・学校の事業としての社会参加に興味、社会と学校の間が多層的な経験の蓄積、批判的な見方、葛藤を見つけることに新鮮さを感じた。・社会を自分事として考えられていない→どう社会参加としてつなぐか。取捨選択をみんなで話あって行動する岡島さんの実践に興味をもった。・理論については学んでいるが、どのように実践がなされているのかに興味深かった。・社会科授業の中でどのように社会参加を？子どもたちの主体的な社会参加への学びが興味深かった。・学校という狭い（考え方なども含め）空間でどのような社会参加が可能か。児童や生徒がもつ可能性・「自分事にする」ポイントは？自分の生活に関わっているとわかるようにする、自分と近いところにあることを意識させる工夫。体験したことは自分事になりやすい、生に触れる。
3	・広く使われていない電気自動車について生徒が実際の会社の人と考えるのが印象に残った。日常生活に参加できるような形。難しい領域でも子どもが積極的に考えていた。・社会課題と子どものつながりを縮めることがよいと思った。・子供はそのような教育を受けてそのあと卒業した後どのような人になるのだろうか？
4	・自動車工業の学習で、「リーフは買えない。」といった考えに至った子どもの気持ちを大切にしたい。そうなった時に、他の外部人材と連携は考えなかったのか。連携するとすれば、どのような外部人材と連携をすると、子どもの視点が広がり、加えて子どもの主体性を重要視しつつさらなる学習課題に向けた主体的な活動を行うことができるのか。・社会参加を考えるキーワードとしての「自分ごと」に関して、疑問を持つから主体的になるのか、主体的だから疑問を持つのか、教員として、大人としてどのような環境を整えていけば良いのか。
5	・社会参加は、政治参加だけではないということがわかった。・自分の中だけのものが、社会に繋がっているという自覚。・斜めの関係を取り入れた授業を作りたい。・地域との関わりをどのように授業に取り入れるか。・外部の人たちと関われる先生、関わりを避ける先生がいる。子どもたちの有意義な学びを常に意識して授業作りすべき。・自分たちの手でアクションを起こせるような授業◎・学んだことを丁寧に言葉にするというプロセスを取り入れることの大切さ。
6	・外部と学校の連携の限界。・若い人が中心となってしているのがよい。自分ごととして捉えることが大切。・オンラインでは外部の人と繋がりやすくなる。・カリキュラムの面では総合などと連携も必要。・社会に参加しにくい人へのアプローチ。
7	・企業とのつながりに関して、学校と外部とのつながり。学校側がなかなか柔軟に対応してくれない。学校の先生は地域の人ではないという問題。学校内部の苦労は見えない。先生方がその気になってくれないと関係づくりが難しい。システムとして強制する必要性？大人の社会参画をどうやるのか？コロナの関係で問題意識は持ちやすくなっている→これを機会に！
8	・学校のカリキュラム・年間指導計画がある。外部人材は活動されている。教師が橋渡しの役割。教育学部と社会共創学部との学生間のつながりは？無理なくつながるにはどうすればよいのか？発達年齢の違う場合、一律に扱うことはできるのか。中1だから社会参画はできない、子どもだからここまでというのが日本の教育の課題。教える側と教えられる側という対等ではない問題ではないか？社会を構成している者としては対等な立場ではないか？
9	・NPOと学校の持つ役割の微妙なずれがあるのでは？→どちらかには寄らざるを得ないと思う。・学校に対する認識が厳しい。・外部との教師、学校とのつながりをどのように確保して子どもの学びに活かすか。・「学校だけ」の限界は確かに存在する。外部との連携は社会の拡大に寄与することができる。・学校の特徴である、異質な人たちが混在する空間をどのように活かすか。

全ての話題提供者の報告に「自分事」というキーワードが出てきているのが印象に残りました。ここで言う「自分」とはどのような存在なのでしょう。子どもたちを成長させることを使命とする教育関係者は、「社会参加」を考える際に、このことに真剣に向き合い意図的計画的な授業作りを行う必要があると感じました。最後になりましたが、本会の開催に当たって、様々な方々より多大なご支援を賜りました。特に J-CEF 運営委員、実行委員の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

(コーディネーター：愛媛大学教育学部講師 井上昌善)